
ホワイトデーの騒動

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイトデーの騒動

【Zコード】

N4843A

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

前回のバレンタインデーの思い出の続編。3月14日、希へのプレゼントを考える勇人だが・・・

(前書き)

この作品も、例によってLitotakuのキャラを許可を得て使わせてもらっています。

ホワイトデー の騒動

作山口多聞

人物設定 この作品の主要人物はblue - wing管理人のlittさん的小説の登場キャラクターを許可を得て使用させていただきました。

20XX年3月14日 米花町工藤邸 15・00

「ただいま！」

玄関の扉を勢い良く開け、この家の次男で帝丹小学校2年生の工藤勇人は靴を無造作

に脱ぐと、直ぐに二階の自分の部屋に掛け上がった。

その様子を、母親である工藤蘭は冷静に、その親友である服部和葉は少し驚きながら見ていた。

「蘭ちゃん、勇人君どないしたんやろ？」

和葉が蘭に問い合わせる。

「どうせいつものことよ。事務所の方に警視庁の人來ているのがわかつて、早くそっち

に行きたいから慌ててるのよ。」

蘭は呆れながらそう言つた。

「そなんやろか、なんかいつもと少し違つて違和感があるような。」

和葉は首をかしげた。

「あ、そう言われば。なんか、ただいまの声が少し切羽詰つて
いる感じだつたような。」

そういうて、蘭も首をかしげた。さすが女のカンはするどい。
と、そこへ勇人が階段を駆け下りてきた。しかし、その格好は蘭
が予想していた物と違
つていた。

「あら、勇人出掛けれるの？」

蘭が玄関に向かう勇人に声を掛けた。そう、勇人は外へ出る格好
で降りてきたのだ。

「うん、ちょっとね。」

靴を履きながらそう言つ勇人。

「ねえ勇人君。事務所の方に刑事さんたちが来るとるらしいけど
そつちにいかんでもええ
の？」

和葉が気になつて聞いてみた。

「うん、大事な用があるから。」

さらりと勇人は言つた。だが、蘭と和葉には衝撃的であった。

「「え！！」」

二人の声がハモッタ。事件以上に大事な用とは一体？

大いに気になる。そこで、蘭はある事を思いついた。

「あ、勇人。外へ行くならついでに銀行に行つて通帳記入してき
てくれない。」

そう言つて蘭は通帳を差し出す。

「ええ、俺今急いでるのに。」

不快な表情をする勇人。

「ふうん。そんなんに大事な用なの？」

「え、それは。その。」

言葉を濁す勇人。それを見てしてやつたりという表情になる蘭。
(我が息子ながら、わかりやす過ぎるわよ。)

「だつたらええやん。勇人君、お母さんの言つこときかなあかんで。」

「ああ、もうわかつたよ。」

和葉にまでそう言われては、勇人に拒否する事など出来なかつた。
「じゃあいきます。」

蘭から通帳を受け取ると、勇人は立て掛けであつたスケボーを持って出かけていった。

「どうやら希ちゃん関係の様ね。」

「そうみたいやね。けどほんま血は争えんわ、新一君と蘭ちゃんみたいやわ。」

和葉がそう言つた途端真っ赤になる蘭。

「ちょ、ちょっとなに言つのよみ和葉ちゃん、私達あの歳じやまだあんなんじやなかつたわよ。」

「冗談や、冗談。」

「もう。」

そして二人は笑つた。

同時刻

「全く、母さんつたら今日は忙しいのに。ま、とにかくひとつと終わらせちまおうつと。」

スケボーを地面に置いて、勇人は飛び乗る。

このスケボー、あの新一が江戸川コナン時代に使つていた物と外見こそ変わらないが、中身は数段グレードアップしている。

まず、電池の小型化により、長時間の連續運転が可能になつている。また、サスペンションの改良により走行性能や安定性、悪路の走破能力が各段に向上していた。加えて新素材の採用により重量も従来型より軽くなっている。二十年の科学の進歩の結晶と言える。これらの改良を行つたのはむろん阿笠博士である。ちなみに彼、72歳になつた現在も、新一向けに新たなアイテムを作りつづけている。最近は某アニメの主人公である少女が腐海を飛ぶのに乗つていた凧を作つているとかいないとか。

「よし、行くか。」

スケボーの発車ようのボタンを押そうとしたとき。

「勇人、どこ行くの？」

ふいに聞き覚えのある声が。

「え、か、希。いやちょっと母さんに使い頼まれて。」

狼狽しながら答える勇人。

立つていたのは勇人の幼なじみである円谷希であった。

「ふうーん。じゃあ暇だからついてつてもいい？」

「え、まあ良いけど。」

一瞬躊躇したが、勇人はOKした。

「やつたー。」

そう言つて希は勇人の後に乘る。ちなみに彼女は何回か乗せてもらつているので特に乗せて不安なことはなかつた。

「じゃあ、しつかり掴まつていろよ。」

勇人の言葉に、希はしつかり彼の腕を掴んだ。そして、勇人が発車ボタンを押した。一瞬、モーターが低い音を上げ、スケボーは凄まじい勢いで走り始めた。

勇人は取り敢えず、通りへ向かつた。しかし、彼は心中で思つていた。

「ははは、今日は厄日だ」と。

さて、勇人がこの日大好きな事件にさえ目もくれず外へ出たのは、母親とその親友の推理どおり、希に関することであった。

一ヶ月前、バレンタインに手作りチョコ「をもらつた勇人は、そのお返しをホワイトデーにちゃんとしようと思っていた。ところが、それを何にしようか考え方にも、周りがそれを許さなかつた。その後、バレンタインの二人のことが学校中に知れ渡り、それが原因でひつきりなしに勇人のもとへ人がやつてくるようになつたのだ。

記事にしたいので詳しい事を聞きたいという新聞委員や、ドラマの脚本作りの元にしたいという放送委員。また、希が好きで彼女を奪い取るべく決闘を申し込んでくる男子。（ちなみにこれまで來た者は全滅）また、刺激されいままでまして強力にアプローチしてくる女子もいた。（特に同じクラスの小嶋瞳）

そんな訳で、勇人はプレゼントを選ぶ機会を逸していた。そしてようやくその機会を得たと思ったら、「こりんのとおり」という訳である。

そして、この日は本当に厄日と成るのであつた。

米花銀行本店 15・30

「じゃあ希、俺窓口に言つてくるからこりんで待つてろよ。」

「うん、わかつた。」

勇人は希を一人待合席にまたして窓口へ向かつた。

「通帳記入お願ひします。」

「あら、ボウヤお使い？ 偉いわね。じゃあ・・・」

窓口の行員がそう言つたが、勇人は殆ど聞いてなかつた。勇人と

しては一刻も早くお使いを終わらせ、希を家に返して、再びプレゼント探しに行く事しか頭になかったからである。

勇人は気になつてチラッと腕時計を見た。ちょうど3時半を回つた所であつた。

「じゃあ、ちょっと待つてね、い

行員がそこまで言つた時、

ガシャン！！

盛大な破碎音が入り口の方から響いた。見ると、一人組の覆面を被つた男がいた。そしてその手には拳銃が握られていた。

「強盗だ！！」

誰かが叫んだ。この一言で銀行内はパニックとなつた。もつとも、ちょうどお客様の少ない時間だつたため、それ程のものではなかつたが。

一方の強盗犯達はそんなことにおかまいなく、一人はカウンター内に侵入し、もう一人がカウンターによじ登つて言つた。

「騒ぐな！とつとこいつに金を詰めり、さもないと問答無用で殺す！！」

そう言つて、持つていたバッグを行員に投げつけた。

投げつけられた行員は直ぐに金庫に行つて金を詰め始めた。

一方、勇人はといふと。カウンターの影に隠れながら、時計型麻酔銃の照準装置を上げ、いつでも撃てるようにしていた。ちなみに、この麻酔銃も改良されていて、初代が単発だったのに対し、連発が可能となつていて、また照準装置もより精密な物になつていた。加えて、倍近く射程も延ばされていた。

「こいつでなんとか仕留めてやる。」

そう目論んでいた勇人だつたが、その思いは直ぐに打ち砕かれた。

「動くな、銃を捨てて投降しろ。」

声のした方向を見ると、掛けつけた警備員が銃を強盗犯に向けていた。

この時代、銃刀法の改正により、国から許可を受けた警備会社や

探偵には特別に拳銃の携帯が認められていた。また、警備員の服装も常時防弾チョッキを着てヘルメットをするのが普通となっていた。その警備員向けて、強盗はすかさず発砲した。しかし、弾は当たらず、警備員達の後の壁に弾痕を残しただけであった。

こうして銃撃戦が始まってしまい、勇人は麻酔銃を撃てなくなってしまった。

「畜生！」

心の中で悪態をつく勇人。

一方、警備員達も反撃した。そして見事強盗に命中した。しかし、強盗は一瞬ひるんだが、直ぐにまた反撃した。

これはどう言う事かというと、実は警備員の使っている銃に問題があった。

法律によつて、一般人に携帯が許されているのは、警察でも使用されている二ユーナンブ改型拳銃である。しかし、その弾は警察とは違つて、減装（火薬を減らすこと）した物で、おまけときてあたつても破裂するゴム弾か、ペンキが飛び散るペイント弾のみであつた。これでは人を倒す事は出来ない。

一方の犯人達は、この時コルト軍用拳銃を持っていた。これは軍用と名がつくだけあつて威力は大きい。しかし反動も大きい。そのため、素人の強盗犯がいくら狙つても当たるはずがなかつた。

結局この銃撃戦は双方が弾切れになつて終わつた。

ちょうどその時、行員がバッグをもう一人の強盗に手渡した。

「よし、すらがるぞ！」
「おう！」

強盗犯が逃走に移る所とした。

「チャンス」

勇人は一人がカウンターから出てきたところを狙おうとした。しかし、

ファンファン

サイレンの音が。行員が机の下の通報ボタンを押していたのだ。

「ち、警察か？こうなつたら、お！」

強盗は何を考えたのか辺りを見まわした。そして突然予期せぬ方向に飛び出した。

「なに！？」

勇人が見たのは、待合席そばでうずくまっていた希に向かう強盗の姿であった。

「お嬢ちゃん、ちょっとついてもらおつか？」

そういうつて強盗は希の口を押さえ、その腕に抱えた。

「なつ！！」

予想外の事態に言葉が出ない勇人。しかし、次の瞬間には叫んでいた。

「希！！」

勇人はカウンターの影から出て直ぐに強盗を追おつとした。しかし、その時にはもう強盗達は走り出していた。そして、外の車に乗り込んでしまった。

「人質を取りやがつた！！」

「警察はまだか？」

行員たちの叫び声が飛び交う。

一方、勇人はすばやくスケボーを持って外に出た。強盗達の車はからうじてまだ見えていた。

「希、待ってる、今助けてやつからな！」

直ぐにスケボーをスタートさせ、強盗犯を追跡する。

スケボーの最高速は80km。楽に追いつく事が出来た。しかし、強盗は勇人の追跡に気付いたのかスピードを上げた。ぐんぐん離されていく。勇人もなんとか追いつこうとするが、他の車を避けながらの追跡であるから限界がある。

「畜生！よし。」

勇人はポケットからなにやら棒状の物を出した。そしてその先を強盗の車に向けた。そしてボタンを押した。

ポン！

軽い音がすると、何かが飛び出した。

これこそ、阿笠博士謹製の新兵器、ペンライト型発信機発射器である。それまでは発信機を対象に直接つけるか、投げつけるしか方法がなかった。その欠点を改良すべく作った物である。ちなみに発射方式はガス圧式である。

発信機は見事命中した。しかし、それから直ぐに完全に振り切れてしまつた。すぐに、勇人は持つていた眼鏡を掛けた。改良を重ねた追跡眼鏡だ。

アンテナが出て、片側のレンズに映像が投影される。

勇人はスケボーから一端下りて、レンズに映つた光点の動きに注意する。

「東に向かつてる。米花町からもう直ぐ出ちまうな。どっちにしろとも追えねえか。くそ、希がさらわれるなんて。俺は何をやつてたんだ。」

勇人は悔しくてたまらなかつた。強盗犯に麻酔銃を撃ちこむことばかり考えて、守るべき人を守ることを怠つてしまつた。

「希、ごめん。……ん！？」

勇人は光点の動きを注意して見る。

それまで東に猛スピードで動いていた光点の動きが急に鈍つた。それどころか、再びレンズの中心に近づいてくる。

「米花町に戻る氣か？じゃあ東に向かつたのは警察を欺くためだつたのか？」

頭の中で強盗達の動きを推理しつつ、勇人は再び光点の動きに注意する。

「この方向は、米花港！なるほど、倉庫街に隠れるつもりだな。よっしゃー、希待つてろよ、今度こそお前を助け出す。」

再び、スケボーに乗り勇人は米花港に向かつた。

一方、勇人が強盗を追つた1分後、警察が銀行に到着した。

先頭のパトカーから30代ぐらいの眼鏡を掛けた若い刑事が飛び出した。だが、彼が店内に入つた途端、冷たい非難の視線が浴びせられた。

「あんたら今更なにしにきた」とでも言われている様だ。

「う！」

その刑事は一瞬ひるんだが、直ぐに気を取り直した。
そこへ、店長らしい男が寄つて来た。

「警察の方ですね？米花銀行本店店長の富貴です。」

「米花署の鈴原です。早速ですが、状況をお教え下さい。」

鈴原警部は直ぐに手帳を開け、メモをとる。

「はい。強盗犯は2人で、拳銃で武装していました。」

「いくら盗まれましたか？」

「二千万です。」

「怪我人は？」

「いません。ただ、女の子が一人さらわれました。」

「なんですって！」

「ええ、サイレンの音がした途端、急に。」

「どうか、だからあんな非難の視線を浴びせられたわけか。」「となると強盗誘拐事件か。すいませんが、その女の子については何か？」

「ええと、小学校低学年ぐらいで、こげ茶色のロングヘアでした。あ、そうそう一緒にいた男の子が希と呼んでいました。」

「その男の子は？」

「それが、強盗犯を追つていきました。」

「ええ！すいませんその男の子についてお教え下さい。」

鈴原の叫びに多少うろたえながらも、富貴は再び話し始めた。

「はい。ええと年恰好は女の子と同じ位。後は、女の子が勇人と

呼んでいました。」「わかりました。」

手帳を閉じ、鈴原は近くにいた警官に声を掛ける。

「おい、君。」

「はい、なんでしょうか警部？」

「すまんが、すぐにパトカーの車載コンピューターで身元の照会を頼む。」

鈴原は手短にさつき店長から聞いた二人の子供の情報を警官に言った。

「わかりました。今すぐやります。」

その警官は店の外に出ていった。

警官を見送ると、鈴原は行員に聞きこみを行っていた50代くらいの刑事に超えを掛けた。

「西尾さん。何か手がかりは掴めましたか？」

鈴原の部下であり、先輩であるベテラン刑事の西尾警部補である。「ああ、警部。具体的に犯人を割り出せるような手がかりはない。取り敢えず防犯カメラの映像を調べさせてはいるが、判っているのは犯人は黒のセダンで逃走した事だけだ。とにかく警部、今は人質の安全の確保を優先して下さい。」

西尾が鈴原にアドバイスする。

「判りました。」

そう言つて、鈴原は店の外のパトカーに向かつた。

「何か判つたか？」

パトカーのところまで戻つて声を掛けたのは先ほどの警官だ。

「はい、二人の子供の身元が判明しました。男の子は工藤勇人君8歳、帝丹小学校の一年生です。人質となつた女の子のほうは円谷希さん8歳、同じく帝丹小学校の一年生です。」

二人の名前に、鈴原は何故か既知感を覚える。

「工藤に円谷?どこかで聞いたことがあるよつな。」

その疑問に警官が答える。

「はい、工藤勇人君は名探偵の工藤新一氏の息子です。そして円谷希さんは、科搜研の若きホープ、円谷哀さんの娘さんです。こりやあ絶対助け出さないといけませんね。」

「そうか。しかしね、君。人質が誰であろうと我々は全力で捜査し助け出さねばならないぞ。」

鈴原の一言に、警官はハツとした。

「警部、すいません。」

「わかれればいい。」

警官との会話を終えると、鈴原は無線機のヘッドフォンを頭につけ、マイクを取る。

「現在パトロール中の全車両、警官に告げる。米花銀行本店に押し入った強盗は人質をとつて逃走中。強盗は一人組の男。黒のセダンで逃走している。人質に取られたのは小学校2年生の円谷希さん。なお、その車両を男の子、工藤勇人君が追跡しているとのこと。各員厳重なる注意を要す。」

そこで、鈴原はマイクの送信を一時中断した。その時。

「ん、これは！」

米花港 16・20

強盗犯のセダンは埠頭の一角に停止していた。

「なんとか警察の目はごまかせたな。」

強盗犯の一人が覆面を外しながら言った。

「ええ、あとは予定どおりやるだけですね。」

そう言って、もう一人も覆面を外す。

「ああ、ただ予想外の事態も起きたがな。」

そう言って、強盗犯達はさらってきた希を見た。ここまで来る途

中で、彼女は縄で縛られ、口にはガムテープを貼りつけられていた。その目には恐怖の色が浮かんでいた。

「どうします？」

「どうするもこうするもない。今となつてはただの足手まいだ。」

強盗達の会話は、希の恐怖をより一層大きくした。

「そんな、こいつら私を殺す気？いやだ死にたくない。誰か助けて、勇人！！」

希は泣きながら心の中でひたすらそう願った。

希、絶体絶命の危機。希は知らなかつたが、ここはかつて母親である哀が黒の組織のベルモットに命を狙われた場所であつた。偶然にも、彼女は母親と同じ場所で命の危機に陥つていた。

「・・殺すしかねえな。」

強盗犯がそう言つて笑みを浮かべた時であつた。

「そうはさせるか！！」

「何！！！」

声に驚いて振り返つた強盗達の前に、スケボーに乗つた勇人が現れた。

「勇人！！」

「くそ！！」

強盗達は拳銃を構えようとしたが、その時には勇人の麻酔銃の餌食となつていた。あつという間に倒れこむ強盗達。

二人組を倒したのを確認すると、勇人はスケボーから降り、希の元に駆け寄つた。

「希、今ほどいてやるからな。」

まず口のガムテープを剥がし、それから縄をほどきにかかる。

「勇人、ありがとう。」

希が小さく呟く。しかし、勇人はそれに気付かなかつた。そして、縄がほどけた。

「さ、行こう。」

希の手を引き、その場を離れようとする。しかし、

「そうは問屋が卸さねえぜ。」

「何！！」

勇人は振り向こうとしたが、その前に後頭部に凄まじい衝撃と痛みが走った。

「うつ！」

頭を押さえ、倒れこむ勇人。

「勇人！！」

倒れた勇人を抱える希。

勇人は激しい痛みに頭がくらくらする中、なんとか目を開ける。するとそこには、先の二人とは別の男が鉄パイプを持つて立っていた。

「残念だつたなボウヤ。実は強盗は俺を含めての3人グループだつたんだ。こいつらを倒した所で油断したのが仇となつたな。」

「くつ！！」

勇人の顔に悔しさが浮かぶ。

「さあ、覚悟してもらおうか。一人仲良くあの世へ送つてやる。」

そう言つて鉄パイプを構え直す男。

く畜生、ここまでか。>

勇人があきらめかけたまさにその時であつた。

「覚悟するのはお前らだ。」

「何！！」

埠頭に多数の警察車両が現れ、あつという間にパトカーから降りた警官達が強盗犯達を取り囲む。

そして、警官隊の先頭に出たのは鈴原であった。

「楊文元、康相玉、花山英男。強盗、誘拐、殺人未遂の罪で現行犯逮捕する。」

男は真っ青になり、何が何やら判らないという表情をしながら、ただそれを鈴原の言葉を聞いているだけであった。

「かかれえ！！」

鈴原の命令と共に、一斉に警官が強盗犯達に飛びかかり、手錠を掛け身柄を確保した。

「畜生、なんでここが判ったんだ。」

さつきの男が悔しそうにしながら言った。

「その子が教えてくれたのさ。その子は持っていた無線機（改良型の探偵団バツチ）の周波数を警察無線に合わせ、リアルタイムで現場の音声を送ってくれていたのさ。そして無線の発信地点からこを割り出せた。ついでにお前達の声からすぐに名前も割り出せたぞ。まあそういう訳さ。よし、連れてけ。」

鈴原の命令により、強盗犯達は連行された。

鈴原は勇人達の元に駆け寄つた。

「大丈夫かい。円谷希さん、工藤勇人君。」

「警部さん、勇人がけがしてるの、はやく病院に連れてつて。」

希が泣きながら言つた。一方の勇人は気を失つているのか、ぐつたりとして動かない。良く見ると、頭から血を流している。

「わかった。西尾刑事、ここを頼みます。」

「はい。」

西尾がそういうと同時に、鈴原は勇人を抱き上げた。

「さ、君もおいで。」

そして彼は一番近いパトカーの後部座席に勇人を乗せ、自分は運転席に座つてシートベルトを締める。希は後部座席に乗りこみ再び勇人に駆け寄る。

「刑事さん。早くして！！」

「ああ、判つてる。」

鈴原は赤色灯を回し、サイレンを鳴らしながら、病院に向かつた。

勇人が眼を開けると、そこには母親の蘭と父親の新一の姿があつた。

「あれ、母さんに父さん。ここには？」

「病院よ、勇人。」

「お前は丸一日気を失っていたんだ。」

両親にそういうわれ、勇人は必死に昨日のことを思い出そうとする。しかし、強盗犯に殴られ、その後掛けつけた警官が連中を取り押された所までは覚えているが、その先の記憶がまつたくない。ただ誰かにずっと名前を呼ばれていたような気がする。

「そうだつたんだ。そう言えば、希は？」

「そこ。」

新一が指差した方を見ると、希が机に突っ伏してかわいい寝息を立てていた。

「昨日は大変だったのよ。面会時間が終わっても勇人のそばにいるつて言い張つて、結局志保さんも光彦君も渋々許したけど。それからずつと勇人の手を握っていたのよ。けど、やっぱり疲れちゃつたみたいね。」

「希。」

勇人は希をじっと見つめようとした。しかし、そこへ父親の雷が落ちた。

「それはそうと勇人、なんでこんな無茶したんだ。蘭なんか警察から連絡受けた時、危うく倒れちまう所だつたんだぞ！…」

「と、父さん。」

「全く、それにお前自身もしかしたら死んでたかもしれないんだぞ・・・」

「そこらへんで許してあげてはどうですか？」

新一の言葉を遮るように、一人の男が言った。

「鈴原警部。」

いつのまにか部屋に入ってきたのか、鈴原警部が立っていた。

「ようやく目が覚めたようだね小さな名探偵君。おつと、自己紹介がまだか、私は米花署の鈴原警部だ。君からの今回の事件の事情聴取は退院後になると思うから、その時はよろしく頼むよ。あと今は君のおかげで事件が解決したような物だ。ありがとう、おそらく君には感状が出されるだろう。」

そのことばに慌てる新一。

「警部、こいつはまだまだ未熟なんですよ、そんな勢いづかせるようなことやめて欲しいんですが。」

「ああ、それはすいません。けじをつけた事に偽りはありません。今回の君の活躍はあるで彼の様だった。」

「彼？」

勇人の頭の上にハテナマークが浮かぶ。

「ああ、もう二十年前になるけど中学で部活動中だった今の妻がボーガンで撃たれたことがあってね、その時事件を解決に導いたのが君と瓜二つの江戸川コナンという少年だったんだ。本当に彼は名探偵のようだった。君を見ているとあの時のことが頭に浮かんで彼と君を重ねて見てしまうんだ。」

「ははは・・・」

鈴原警部の言葉に、苦笑いする新一と蘭。まさか新一がそのコナンとは口が裂けても言えまい。

「う、ううん。あ、警部さん。」

希が眼を覚ました。

「おっと、起こしちゃったようだねお嬢さん。それでは話しあは上なので、自分は失礼いたします。」

そう言って敬礼し、鈴原警部は出ていった。

一方、部屋には奇妙な沈黙が流れた。新一は今会話で怒る気が失せてしまった。また、蘭はなんと言えば良いのか判らなかつた。沈黙を破つたのは勇人だつた。

「あのさ父さん、母さん。ちょっと希と一緒にしてくれない？」

「「ああ、（ええ）良いよ（良いわよ）。」」

勇人の提案に「人はおとなしく従い出ていった。
部屋には一人だけとなつた。それを確認すると、勇人は希の方を

向いた。

「希。」

「なに、勇人？」

その途端、勇人が頭を下げた。

「ちょ、ちょっとどうしたの勇人？」

「ごめんな希。俺がお前をほつといたばっかりに、お前が誘拐されて。本当にお前に怖い思いさせて。それにホワイトデーのお返しも出来なかつた。拳句心配まで掛けちまうなんて。ははは、俺って最悪な男だな。守りたい人ほつといて事件の方に首突つ込むなんて、本当に。」

勇人が自嘲気味にそう言つた。それに対し、希は微笑んで言い返した。

「ううん。そんな事ないよ、勇人は私の事助けようと頑張たつて警部さんは言つてたよ。それにケガをしたのは私を助けるためでしょ、違う？」

「希……。」

「勇人は昨日本当にかつこよかつたし素敵だつたよ。それにね、私にとつては勇人ががんばつて私を助けてくれた事が一番のプレゼントだよ。本当にありがとう勇人。」

最後は真つ赤になりながらも、希は極上の笑顔で言つた。それは1ヶ月前、バレンタインの時に見せた物と同じであつた。

希の笑顔を見て勇人の心臓は跳ねあがる。それをなんとか抑え付け、勇人は笑顔で希に言つた。

「ありがとう、希。」

その二人を、ドアの間から見ていた人々がいた。お見舞に来た工藤邸の住人たちと円谷夫妻だ。

「……………」

二人の様子を見て黙りこくつてしまっている優輝、鈴、紅葉、秋、藍の5人。一体何を考えているのやら。

一方、親達はといふと。

「新一さん。」

光彦が神妙な面持ちで言った。

「なんだよ光彦？」

「あの一人が結婚すれば僕達親戚ですね。」

その言葉に仰天する新一。

「なに考へてるんだお前、あの一人はまだ小2だぞ。」

「あら、素敵じゃない新一。」

「そうやん新一君。」

蘭と和葉が横から口を挟む。

「いやそうじゃなくて、たしかにそうなつても良いけど、なんどそこまで論理が飛躍するんだって言いたいんだ。それに光彦は一人娘がとられてもいいのかよ？」

「そうや、そうや。工藤の言つとおりや。」

新一と平次が言った。

「勇人君みたいな立派な子だつたら良いと思いますよ。」

光彦がさらりとそう言つて、新一と平次は愕然となつた。

娘をとられることに本当になんの抵抗もないのかと言いたげだ。
さらに、この会話を聞いてしまつた優輝と秋も相当なショックを受けていた。なぜ一番小さい勇人が認められて自分達は認められないのだと言いたげだ。

そんな中、哀はこう思つていた。

く希、私本当に嬉しいわ。あなたがそんなに幸せそうに生きてく
れでいて。勇人君とこれからも仲良くするのよ。なんつて言つても
工藤君の子だの。彼ならきっとあなたを守ってくれるわ。>

病室の外でこのような人々の思惑が交錯する中、勇人と希は外を見ていた。そこには彼らの仲を象徴するように、雲ひとつない青空が広がっていた。

＜一人の未来に幸あれ＞

完

あとがき

というわけで、勇希小説第二段です。形式的には前作の続編です。

しかし、今回の作品は作者の趣味が爆発してしまいました。まあ、この後受験突入のため、しばらく小説に打ちこめないのでどうかお許し頂きたい。今回の作品の最後では、光彦と新一の考え方を対照的に書きました。独占的新一とあくまで娘のためを思う光彦。この意図については皆さんの「想像にお任せします。なお、最後に快斗と青子が出てこないのは、海外に行っているからです。そして、鈴原警部は特別編1-1巻登場のキャラクターが成長し警部になった」という設定で出しています。

あとがき

今回の小説においては、前回と違いキャラクター達に激しく動いて貰いました。その過程において一番戸惑つたのがキャラクターの性格でした。この小説のキャラクターの殆どは、blue-winの管理人のLitoさんの小説登場のキャラクターです。そのため、オリジナルの要素を壊さないというのが命題でした。しかし、やっぱり書いていると勇希のイメージがコ哀とダブってしまい、大いに苦戦しました。しかし、なんとかやれるだけやつてみました。多くの助言と、快くキャラクタの使用を承諾してくださったLitoさんには本当に感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4843a/>

ホワイトデーの騒動

2010年10月15日17時38分発行